リーディングDXスクール事業 【実践事例】

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校（鹿児島県）

＜教育利用＞ ①「生物の授業における生成ＡＩの利用」
論述文を生成ＡＩに評価させ、生徒がブラッシュアップする活動

授業のながれ

趣旨の説明→プロンプトの配信（授業支援ツールを使用）→ChatGPTに問題をコピー＆ペーストし、生徒が論述問題を解答する→AIが採点→指摘された部分を生徒が修正し、再度AIに採点させる→感想の送信

プロンプト

（詳細は省略）生成AIには「学校の先生」という立場を与え、生徒が送信した論述文を配点や採点基準などの条件にしたがって採点するように指示を出す。また、間違っている部分を指摘したり採点の根拠も示したりするよう指示する。

生徒の活動

論述文の送信（１回目） ⇨ 生成AIの回答を確認し、指摘された部分のファクトチェックを行う（教科書等を使用）。 ⇨ 論述文を修正し、生成AIに再度送信する。必要であれば同様の作業を繰り返し、よりよい論述文にする。

ま と め

生成AIからの情報が正確ではなかったり、生徒の表現は正しいのに採点で「間違っている」と表示されたりするものがあった。教科書や教師の確認を通じて正確な論述を目指す必要があり、授業の終わりにこれを強調した。教師一人では生徒全員の論述をチェックするのにかなりの時間を要するが、生成AIを上手に活用すれば論述の演習を通して個別の学習を深めることが可能であると考える。